

フォークナー：短編小説の構図

太田直子

I

Malcolm Cowleyは*Portable Faulkner*のPrefaceの中で、Faulknerの小説構成の欠点を“all his novels have some obvious weakness in structure”¹⁾と指摘するが、Faulkner自身は、“the unity and coherence, the proper emphasis and integration”²⁾を持たすことで小説を構成していったと語っている。彼のこの手法が、テーマやプロットが異なる短編を統合して短編集にするのではなく、短編のあるものを再編成したり、ある短編を長編小説の中に組み込んで長編小説を肉付けするものであるということが、作品の幾つかの例から伺い知ることができる。

1919年に*The Mississippian*に“Landing in Luck”を発表してから、Faulknerは数多くの短編を執筆して出版社に送った。その多くが1920、30年代に書かれた作品である。1931年、最初の短編集*These 13*が発表され、その中には彼の代表的な短編といわれる“*That Evening Sun*”や“*A Rose for Emily*”などが含まれている。この13編の短編を含んだ42篇の短編を集めた*Collected Stories of William Faulkner*が、1950年にMalcolm Cowleyによって編集された。Cowleyは編集にあたり、*These 13*の13編の短編と*Doctor Martino and Other Stories*から“*The Hound*”と“*Smoke*”の2編を組み入れ、あとの17編を1932年から1948年の間に書かれた短編の中から選んだ。これより少し前の1947年、CowleyはFaulknerと協力して、*The Portable Faulkner*をViking Pressから発刊している。CowleyはFaulknerの短編を数多く紹介することに加えて、長編の一部を短編として独立させて発表するなどFaulknerの長編と短編との選考編成の糸口を示唆し提供していると言える。

Faulknerの死後、1979年にはJoseph Blotnerが、Random Houseから未発表作品を含んだ45の短編を発表した。未発表の作品は13編。その中には“*Gavin Blount Stories*”と呼ばれる一連の作品、“*The Big Shot*,” “*Dull Tale*,” “*A Return*”が含まれていた。最初の2編は1930年書かれた作品である。1930年から1932年にかけてFaulknerは実に数多くの短編を書いている。この時期はまさしくFaulknerの最盛期“*The Great Years*”と考えられるが、不思議にもこの間に書かれた短編は*These 13*に編集されたもの以外は、*Uncollected Stories of William Faulkner*が出版されるまで発表されることがなかった。“*A Return*”は1938年の作品である

が、“Gavin Blount Stories”の中の一つで、1930年に書かれた“Rose of Lebanon”を再構築した作品である。Blotnerは*Uncollected Stories of William Faulkner*の編集の際に“Gavin Blount Stories”の中の一作“Rose of Lebanon”を削除しているのである。この経緯についてBlotnerはその“Introduction”の中で、次のように述べている。

Where two treatments of the same short-story material exist, as in “Rose of Lebanon” and “A Return,” the one that seemed the better of the two has been used.³⁾

Blotnerが拙劣であるとした“Rose of Lebanon”は、Faulknerの死後33年の1995年に“His Last Great Short Stories”⁴⁾として*The Oxford American*で発表された。

*The Oxford American*は1992年、Faulknerの故郷Oxfordにある本屋に勤めるMarc Smirroffによって発行された雑誌である。彼はFaulknerの文学的土壌のあるOxfordから、南部文化を表現する必要性を感じ、この雑誌の刊行に取り組んだ。この雑誌は、資金不足の為に定期的に発行することが困難なこともあったが、彼同様にFaulknerや南北戦争の亡霊たちに引き寄せられるようにOxfordに住み着いた現代アメリカの文学界で活躍するJohn GrishamやBarry Hannahらに支えられ、4万部を刊行する雑誌になった。1930年から65年間忘れられていた作品がFaulknerの志を受け継いだ人々によって新しく命を吹き込まれたことには大きな意義を感じる。

“Rose of Lebanon”は、1930年*Saturday Evening Post*に送られたが却下され、Faulknerが翌年再びアプローチしたにもかかわらず、受け入れられなかった作品である。この話を土台として書き直したのが、*Uncollected Stories of William Faulkner*に編集された“A Return”である。*The Oxford America*の中で、“Rose of Lebanon”を発表するに際して、*Uncollected Stories of William Faulkner*の中にこの短編が含まれなかったことについて、“When compiling Faulkner’s *Uncollected Stories*, omitting, however, what is arguably the best of them—Rose of Lebanon—which is now published here for the first time”⁵⁾とDonald Kartiganerは述べているが、Blotnerが何故この作品を採用しなかったのか、そしてそれがなぜ間違いであるのかを、*The Oxford American*に発表された“Rose of Lebanon”⁶⁾を分析することによって考察していきたい。

II

“Gavin Blount Stories”といわれる作品群は、医師Gavin Blountを中心にして物語がすすめられている。Blountは、町の旧家の出身で、1864年に南北戦争で戦死した祖父に対して羨望を抱き、彼の生活はすべてこの祖父の時代の中に存在するといってもいい。幻影と現実の境を失った彼の姿は、*Light in August*のGail Hightowerのモデルであると考えられている。

1930年の1月に書かれた“The Big Shot”は南北戦争以降に成り上がってきた poor white の Dal Martinが南部の旧家が参加できる Chickasaw Guardsの舞踏会に自分の娘 Wrennieを参加させることによって、自分の社会的地位を獲得しようとする物語である。その Chickasaw Guardsの代表を勤めているのが、過去に生きる Gavin Blountなのである。賄賂を送り舞踏会への参加を迫る Martinに対して、南部の名誉にかけて拒む Blountであるが、尊敬する自分の祖父の名を付けた美術館の建築の話をもちかけられると、Blountはその申し出に心が動き、Wrennieの舞踏会への参加を承諾する。しかし、趣味の悪い看板が立てかけられたのを見て後悔の念にかられ、結局は自殺をすることになる。父親の努力のかいもなく、Wrennieは自動車事故で殺されてしまうのであるが、その犯人が Popeyeである。この Popeyeはまさしく *Sanctuary* に登場する Popeyeの原型であり、そして、Wrennieの表象は Temple Drakeへとつながっていく。

Wrennieの父 Dal Martinについては“The Big Shot”の中でその過去が明らかにされる。

And you can imagine him when the boss spoke: “Don’t you ever come to my front door again. When you come here, you go around to the kitchen door and tell one of the niggers what you want.”⁷⁾

白人の家に正面玄関から入ることを拒否された Martinは、その屈辱をバネに貪欲になり上がっていく。Martinのこの屈辱的なシーンは、金持ちの白人の館の裏口へ回るようにと使用人の黒人から屈辱的な扱いをされた Sutpen 貪欲な出世欲の執念の源に他ならない。

(*Absalom, Absalom!* 1936)このように、“The Big Shot”の中には、長編に登場する人物の名前やその性格を引き継ぐ人物が数多く登場するのである。

Popeyeの逸話を取り除いて“The Big Shot”を再編した作品が、同じく *Uncollected Stories of William Faulkner* に収集された “Dull Tale”である。この話は、田舎者の Dal Martinが40歳になった Gavin Blountと対面し、娘の舞踏会への出席を頼む場面から始まる。その後、Gavin Blountの生い立ちが詳しく語られていくのであるが、子供の頃に父親にからかわれ、リネンが納めてある押し入れに入り、“He would tremble, feel faint; he would perspire and writhe with impotent agony,”⁸⁾と、Blountがここで大きな痛手を受け、その後の彼の性格を決定するような話が語られる。大人になり医者になってからも彼はこの “that same horror and despair”⁹⁾を感じ続け、結婚することもなく、南北戦争を経験した世代の老人だけを患者とし、社交クラブの会長という名誉職を得て、過去の中に暮らす。彼のこの逸話は、ほとんどが “The Big Shot”と軌を一にしている。

“Rose of Lebanon”を書き直した “A Return”は、Randolph Gordonが、父 Charles Gordonと母 Lewis Randolphの結婚の経過、父が南北戦争に出兵したあとの母の生活、そして、自分がいかに今の地位に至ったかなどの過去を Gavin Blountに話すという形式で構成されてい

る。登場人物が両親や家族の過去を家族や黒人から聞いて、それをまた誰かに話すという形式は、Faulknerの作品の中でも多く見ることができる。Randolphは、母や家族の話を母や黒人から何度も聞くことで、それを経験したかのように話すことができる。そして彼の話に興味を抱いたBlountは、さらにそれを繰り返し聞き繰り返し話すことで、自分の経験として体の中にしみ込ませていく。幾度となく聞かされてきた話は、度を重ねるごとに、その話し手と聞き手の時間的な感覚をなくし、恰もその中に自分が生きていたかのような錯覚を起こす。

“A Return”に登場するGavin Blountは他の短編と異なり、Randolphの父Charles Gordonと同時にLewisに恋をしたCharles Gordonの恋敵である伯父を持つことになっている。戦場へと向かう恋人と一瞬のうちに結婚を決め、夫の帰りを待ちながら健気に女一人で生きていくSouthern Belleの鏡とでもいうべき女性Lewis Randolphの話を聞くことで、Blountは彼の伯父と同じ経験を自分もしたかのような錯覚に陥り、密かにLewisに思いを寄せてゆくのである。最後にはBlountの願いが叶い、彼はRandolphとLewisと食事をするようになる。しかし、Lewisにスープ皿を投げつけられる。BlountはRandolphに“‘I want your pistol.’”¹⁰⁾と言い、彼からピストルを受け取るのである。絶望と屈辱を感じたであろうBlountから、次の朝Randolphにピストルと彼のメッセージが届けられ、次のような言葉で物語が終わっている。

*You seem to have been right again, if being told you are right can be any satisfaction to you anymore. I said once that she and her kind can take it and we can't and so that's what's wrong with us and you said Maybe and I was wrong, which both you and I expected. But you were wrong too because I can take it because why shouldn't I? Because Gavin Blount beat him at last. It might have been Charles Gordon she gave the rose to but by God it was Gavin Blount she threw the soup plate at.*¹¹⁾

“A Return”は構成において、その源になった短編“Rose of Lebanon”より優れているといわれている。ここにFlem ShopesのモデルともいえるMartinという人物が、Faulknerの説話の世界に導入されてきたことも注目に値する。しかし、Blountのような「社会に適応できない人物」を物語の中心人物と考えると、上記の最後のメッセージでは、そのような人物像を言い得て特記するには、なお舌足らずの感が歪めないと思われる。

III

作品として劣るとされて1995年まで発表されなかった“Rose of Lebanon”の構成を考察してみる。

*The Oxford American*に発表された“Rose of Lebanon”は、3人称の語りによる6章から構

成されている短編である。43歳のGavin Blountが自分の患者である老女の家を訪問し、Ran Gordonの話を引きかけに、Ran (Randolph)¹²⁾ や周囲の人々から聞いたRanの母Lewis Randolphの話をお女に語り聞かせるところから始まっている。I章とIII章では、Blountと老女を会話が3人称のナレーターによって語られているが、その二つの章に挟まれるようにして、Lewis Randolphの歴史がII章で紹介される。

Blountが患者である老女のベッドのそばに座り、黒人の召し使いが持ってきた“Yankee's Head”を飲みながら“Lewis Randolph is coming back to town.”¹³⁾ と話を切り出す。彼女の息子Ranの話については興味を示していた老女であるが、Lewisの名前がでると突然黙り込む。この様子から、読者はLewisについての逸話が存在することを知らされるのである。そしてI章は1861年の“the Guards' Ball”に話が及んだところで終わっている。

II章は、I章とIII章で展開するBlountの語りの裏付けになるものである。物語の展開に従って、読者は客観的な視点にたつてI, III章のGavin Blountを分析することができ、さらにこの短編全体のプロットの解説の役目をはたしているように思える興味深い構成になっている。Dos PassosのNewsreelのような働きとまではいえないまでも、客観的な事実のように描写することにより、読者の中に南部社会の意識と興味をうえつけていく。

III章に入り、Blountが“I dont remember Grandfather very well, but I have heard Granny tell about Lewis Randolph.” (60-62) と老女に語るにより、II章の解説とBlountの聞いた話とが同一化され、形式の異なるII章がI章III章と同化していくのである。しかも、Ballという華やかな南部社会の伝統と、南部人が総力をあげて戦争へと進んでいく中、そこに巻き込まれていく男女が、Blountの考える理想の世界の中で描かれる。これはすなわち過去にとわれ、その幻想の中に浸るGavin Blountそのものの姿に他ならず、その歪められた意識を読者も経験することになる。そしてBlountの意識下の世界の中で、この老女の反応だけが我々読者に新たな意識を与えてくれるのである。

Ballに参加したLewis Randolphが戦争へと向かい、Charley Gordon¹⁴⁾ と電撃的に結婚式を上げることになったことを夢中に話すBlountは、“I hope...” (62) と自分の希望と脚色を加えながらこの結婚を美化していく。ベッドの中でその話を聞いた老女は、“I always said that he was a fool.” (62) “I have told her that they were both fools,” (62) と冷静に対処し、簡単に判断をくだす。Blountの情熱的な話のそばで老女がこのような反応をするのは“Dull Tale”においても同様である。老女の反応は、Blountの話に対しての客観的な、つまりは社会的な判断を示す物差しの役目をもっていることが分かる。

こうした老女の反応に一瞬言葉を失ったBlountは、話を中断して老女を観察する。彼女の顔にある“not courageous but invincible, not victorious yet undefeated” (62) を感じ取り、逆に南部女性の逞しさと不屈の精神を感じ、さらに熱っぽく語り続ける。しかし、反対にBlountの話が進むにつれて、老女の方は、“Her face die... the eye died;” (62) と興味を失っていきが、

“That night when she and Charley Gordon found they could not live without one another. You were probably at the station and heard the noise when the train moved and she on it, with Charley Gordon’s cape above her ball dress, and she went to Knoxville in that day coach full of soldiers and heated by a wood-stove stoked by a negro body-servant, and the next day they were married by a minister who happened to be a private in a regiment waiting there to entrain, just in time for her to take the next train south, back to Mississippi, with a letter from Charley Gordon to his mother written on the back of a bill-of-fare from the station eating-room.” (63)

と Lewis の行動が美化され、Blount の想像によりそれがエスカレートしていくと、ただ一言、“There were other girls at that ball prettier than Lewis Randolph,” (63) と皮肉まじりに反論を唱え、老女は目を閉じてしまう。

老女の目に力がなく、目を閉じてしまう時の Blount の話の内容、その時の彼の行動は何を意味するのであろうか。Blount は、Faulkner の小説に登場する他の悩める男性と同様に、旧南部の中に見いだされた幻想にとらわれ、それを一途に正当化するだけでなく、一定の理屈と概念を披露することによって、自らの正当性を認識し自己満足に陥っていくのである。

“I knew that men and women are different. It’s a deliberate provision. Through no fault nor control of their own, women produce men children, who ennoble them. Not the maternity : that’s an attribute, both crown and chastisement, of any female. A girl-child is mothered and fathered and grandsired by her contemporary generation; a man-child by all time that preceeded him.” (62-63)

旧南部の中に漠然と存在していた男性と女性の観念。女性という神秘的な力を持つ存在に驚異と敬意を持ちながらも、“endure”する女性に対して身勝手なまでに自由に振舞う男性を正当化するこの Blount の言葉に対して、自分の信念を持ちながらもただ目を閉じ、その意のままにさせるこの老女の反応こそ、Faulkner が長編の中で描いていった女性の姿を彷彿とさせるものである。父権社会の中で生きる女性の立場と生き様を明確にあらわすものであると同時に、その父権社会が揺るぎないものであった旧南部という過去にとらわれ歪んだ枠のなかで、現在も生き伸び、片寄ったものの見方しかできない Blount の姿をより一層強調する役割を担っている。

一連の話をおえ、明日 Lewis Randolph と食事をするようになっていたこと告げた Blount は、身動きしない老女の顔をみる。

The woman in the bed had not moved. On the pillow her face was still, the eyes

closed, the motion of the intermittent firelight giving it more than ever an appearance of immobility. "As it will look when she is dead," Blount said to himself. "Like the faces of women in this country, in the South, have looked and will look after they have died, and will die for a little longer yet but not much longer, for a lot of years." . . . "I had believed. . . feared-I was afraid that I would never have sent flowers to Lewis Randolph. Could never have. That's a summing, a totality, of breath." (68)

決して動じることがない女性の顔をみるにつけて、Blountはそれに恐れをいだき、自分が決してこえることのない領域を持つ女性との間の壁を感じながら、彼は、畏敬の世界に閉じこもるのである。

IV

老女との会話で明らかにされたBlount像が、IV章からVI章で具体的に表現されることになる。幻想ではない実像のLewis Randolphに会うことで、彼の幻想と理想は、そのグロテスクともいえるLewisの実像にふれて動揺するのである。

. . . small woman in black that was not silk, without any ornament, not even wedding ring. . . Her face was not an old face, in the sense of slackened muscles and flesh; it was old in the sense that wood or stone become old, as though scoured down upon itself by the sheer impact of long weather, the passing of sheer days and hours of time. Her eyes were dark; her hands a little stiff, with gnarled knuckles; from the instant when she entered the room and took her place beside her big, broad iron-gray son, in the almost furtive gesture with which her hand came out and touched the ranked silver and withdrew again while her covert glance took in the other faces to remark if anyone noticed the action, there was about her that alertness, that watchful, sidelong stiffness of a woman born and bred in a hill cabin.

(68)

実際のLewisの姿は、Blountが抱いた理想の花嫁、女性像とは異なるものであった。結婚指輪もはめず、未だに夫の名字をつかわずRandolphと名乗る彼女の姿は、時間を超越した存在であった。“alertness,” “watchful,” “stiffness”と表現される彼女の姿には、木や石が年月をへるような趣があり、女性のはかり知れない迫力を醸し出している。

しかし、Blountの彼女に対する興味はますます深まっていき、理想の花嫁にたいするものではなく、堅固な南部女性の姿を彼女の中に確認しようとするのである。彼は、Ranや昔話として聞いた彼女のYankeesとの逸話を確認するかのよう、こう話す。

“The trouble is, we could never keep them in the right proportions. Like a cook with too much material. If we could have just kept the proportion around ten or twenty Yankees to one of us, we could have handled them. It was when they got to be a thousand to one, or ten or twelve Yankees to a woman and maybe a child and a handful of scared niggers.” . . . “When just a few of them came around to houses away back in the country, where the folks should even have been safe from Yankees; slipping around back doors because they knew the men were gone, the scarecrows without shoes and without ammunition charging the other hundred thousand of them without even wanting less odds—” (69)

勝手に勇敢な南部女性像をつくりあげていったBlountは、彼女が北軍の兵士を一人殺し埋めたと思ひ込み、彼女をいたわるかのように、もう少し北軍の数が少なければよかったが、男性がいない状態ではどうにもならなかったのだと話をする。しかし、この彼の言葉に対して、Lewisは“granite-like” (69) とその表情を強張らせていく。Yankeesたちが台所に姿を現した状況を迫力のある表情で語り、息子が制する間もなく立ち上がり、当時彼女が北軍の兵士に投げつけたのと同じように、目の前にいるBlountにスプーン皿を投げつけ、そして、65年前に兵士たちに浴びせた“in the same language, in the strong, prompt, gross obscenity of a steamboat mate.” (71) 卑猥で残忍な言葉をBlountに投げつけた。

その後、彼女は手に果物ナイフを握りしめたまま立ち尽くしていた。彼女のは次第に落ち着きをとりもどしたものの、その静けさはすぐに高らかな笑い声になった。Blountは顔を強張らせ彼女の表情と動作を見守るだけしかできなかった。Lewisは“I want to go home.” (71) と落ち着いた声で何度も繰り返して要求した。ヒステリカルな笑いが無気味に響くだけであった。

母親の非礼をあやまるつもり Ran であったが、Blountはその言葉を制して“By heaven, I am the same kind of folks she is; you’re the one that’s an interloper. I’m nearer Charley Gordon’s son than you are.” (72) と言った。彼女の予想外の答えに対してBlountは驚きを隠せない状態であったが、彼は、その彼女への対応をする息子Ranよりも自分の方が彼女を深く理解できる者であると勝手に思い込むのである。それは、生々しいまでの彼女の言葉で、彼が傷付いたのではなく、Yankeeに対して気丈に対応した、まさしく国を守る女の力に畏敬の念を感じたのにほかならない。彼の想像の理想世界に組み込まれたLewisの行動は、彼の中ではますますリアルさを増し萎えることなく、それでもさらにその鋭いけれども歪んだ感性が磨かれて創作されていった。

北軍が家に入ってきたとき、彼女が“derringer”を手にもっており、その拳銃で北軍兵士を何人か殺し、そして埋めたという逸話は、“A Return”の中でも物語のdenouementとして重要視されて語られてきているが、彼女がどのような言葉を使おうが、どうやって北軍を追い払ったにしろ、Blountの描く彼女の像は、よりもっと刺激的なそれでいて堅固な南部女性の

姿に高められていくのである。そしてついに、Blountは時空を越えて、今、現実に関自分の身に起こった彼女の行為を、過去の彼女の華やかな歴史の中に組み込んでいく。

“She kissed hundred and four men in one might once, and she gave Charley Gordon a son. But, by heaven, it was Gavin Blount she threw a soup plate at.”
(73)

“Rose of Lebanon”のBlountのこの言葉は、Blountの気質と、決してかわることない時代錯誤な彼の人生を“A Return”の最後の言葉よりもより明確に表現している。

しかし、“Rose of Lebanon”が“A Return”と異なるところは、Blountの言葉をもって短編が終わっていないということである。最後のVI章で、Faulknerは自宅に帰ったLewisの様子を伝えている。音もなく自動車が彼女を家まで運ばれたことに、彼女は、“And smooth. . . Than a horse. And warm. And I aint going to sleep tonight. I know I aint.”(73)と、1861年、激しい振動の中、馬によって家につれてこられた花嫁の自分の姿と今の自分を重ねあわせ、昔同様に今夜は眠れないことを告げる。そして鶏小屋に行き、鶏たちに餌をあげることに固執するのであるが、それは、彼女の夫Charley Gordonが殺された場所への再来を意味するのである。

戦中、戦後と遅く生き抜いてきた女性の寂しさと、その哀れなまでの犠牲者としての彼女の姿が最後に描写されることによって、この物語が単に、時代錯誤の男性の喜劇ではないことを立証していると考えられる。

V

“Rose of Lebanon”は“Gavin Blount Stories”と称される一連の物語に含まれる短編であることは事実であるが、この短編のタイトルに最初に触れた時、内容はさておきFaulknerの短編の傑作と言われている“A Rose for Emily”を思いおこす。Faulknerの読者であれば誰もこの“rose”という言葉には敏感に反応することであろう。

“A Rose for Emily”は、Miss Emily Griersonという南北戦争時代の遺物の一つのように存在する女性と時代により変化している町の人々の関係、そして彼女の情夫Homer Barronとの謎めいた関係と彼の生死の疑惑と、ミステリー小説風な短編である。このタイトルについて、Faulknerが、“Oh, it’s simply the poor woman had had no life at all. Her father had kept her more or less locked up and then she had a lover who was about to quit her, she had to murder him. It was just”A Rose for Emily “-that’s all”¹⁵⁾と言っているように、まさしくpoor Emilyにささげるバラであった。作品の中には、rosyという表現はあっても、ただの一度もroseという言葉が描かれていない。しかし、彼女に“a rose”を捧げないではいられないほどに彼女の

悲劇性を Faulkner が描いたと考えられる。

“Rose of Lebanon”は“A Rose for Emily”とは異なり、確かに rose がある種のシンボルとして作品の中で登場してくる。タイトルに Rose があるからという理由だけで、“A Rose for Emily”と比較対照することはできないのであるが、最後の VI 章が描かれていることで、単に“Gavin Blount Stories”の一つとして滑稽な時代錯誤の男性を描いたという話ではなく、過去と戦争によって自分の人生を定められてしまった、悲しき女性 Lewis の話と考えると、このタイトルの Rose がその意味をもち、さらには“A Rose for Emily”との共通の概念がその中にあるのではないかと思えてくる。

“Rose of Lebanon”の中で、“rose”という言葉が使われているのは、3 か所である。1861 年に開かれた National Guard Unit で、若者が戦場へと向かうその時の描写に、“there was a red rose like a pistol wound.” (60) という最初の rose が使われている。2 つ目は、Lewis と Charley との馴初めを語る Blount の言葉“so she could give a red rose to Charley Gordon.”

(60)、そして三つめは、夫を戦場へと見送った後、一人で嫁ぎ先へと向かった Lewis を迎える Gordon 家の庭の描写、“It had flower beds, a rose garden.” (63) である。

彼女や南部の運命を決め、彼女の人生の転機となった南北戦争への夫の参戦、女性として一番華やかで人生を決める求婚の際、さらには、Gordon 家の者となるために一人で嫁ぎそこに根付くことになるその時と、彼女の人生の大きな転機に rose が使われていることは興味深いものである。良き時代とされた旧南部からの転機、そして Lewis の少女時代からの脱皮、そして過去から心について離れない未来への思考へと永遠と続く時代への幕開けを示していくと考えられる。バラが植えられている庭を通り、Gordon 家の中に入っていった Lewis は、実家の父母の死を看取り、未亡人となり、義父母を葬る。授かった息子を育て、一人でその家を支えていくが、そうした彼女の生活には、rose という言葉は使われていないのである。

美しいが棘をもつ“rose”は様々な象徴として使われる。「若さ」「春」「母性原理」「太女神」をはじめとして、「人間の心をすくう純粋な献身」をあらわしている。情熱的なバラのイメージなどその強いイメージを持つものであり、負のイメージには使われない。Emily の華のない人生に対して Faulkner が“rose”を贈ったとすれば、Blount の語る Lewis の人生は、rose という言葉が思い出の中でしか存在しない厳しい人生であったことが逆に強調されるのではないだろうか。南北戦争における南軍の敗北に耐えて、決して降伏しなかった Granny, (“Ambuscade”) Miss Habersham (*Intruder in the Dust*), Narcissa (*Sartoris*), Rose Coldfield (*Absalom, Absalom!*) など、Faulkner は男にまさる気丈な女性を描いた。家の名譽と人間としての誇りを守り続けるこの女性像を Mr. Compson は息子の Quentin Compson に、“they have a courage and fortitude in the face of pain and annihilation”¹⁶⁾ と語り聞かせる。そうした勇気と不屈な精神を Blount や Ran といった男性登場人物の中にみることはできない。

“Gavin Blount Stories”の中で忘れられた“Rose of Lebanon”は、Blount 像を創作する点にお

いては、確かに他の3編に比べてそのプロットの膨らみがないことから劣っているように思える。そして、長編作家Faulknerの原点となる要素がBlount像の創作によって無限にひろがっていくことを読み取ることはできない。その上、南北戦争、黒人、没落貴族という閉鎖的なそして発展性のないテーマに、Snopesら poor white が加わることで“foil”の存在が南部社会、Yoknapatawpha Sagaの未来への広がりをもたせるのであるが、“Rose of Lebanon”では、それが描かれていないのである。

しかし、developing characterであるfoilの存在をオミットし、foilの生き様との比較を省略することで、Blountのグロテスクであるが喜劇的な姿が強調され、その彼の異様な思考の原因の一つでもある逸話に焦点をあてることができる。Blountの歪んだ物語の主人公であり、時代に翻弄された未来にたどり着くことができなかった女性の姿を彼の歪んだ視点で語らせることによって、Faulknerの描いたそして描き続けた女性像を見つけることができるのである。人生の後半になってroseをしっかりと受け取ることができず、皿を投げてしまったLewisの人生は、歪んだ社会の副産物であり、現代に対応できない旧南部の姿を現していると考えられる。Faulknerは*The Sound and the Fury*でこうした旧南部社会から抜け出したCaddy Compsonと娘のQuentinを描き、さらには、Snopes三部作で、南部の領域をこえて一人の人間をして活躍していくであろうその可能性を託されたLindaを描くことになる。しかし、Faulknerの描く女性像の原点は、あくまでも勇気と不屈の精神をもつ、耐える女性であり、その典型的な女性Lewis Randolphが他の話と混在することなく素直に描かれている点からみると、Faulknerの作品群の中で意義のある短編であると考えられる。

註

- 1) Malcolm Cowley (ed.), *The Portable Faulkner* (Penguin Book, 1985), p.xxiv.
- 2) Frederick L.Gwynn and J. L. Blotner, (eds.), *Faulkner in the University* (Charlottesville: The University of Virginia Press, 1959), p.108.
- 3) Joseph Blotner, “Introduction” in *Uncollected Stories of William Faulkner* (New York: Random House, 1979), p. xii.
- 4) Donald Kartiganer, “An Introduction to the Last Great Short Story,” *The Oxford American*, (May/June, 1995), pp.51-53.
- 5) *Ibid.*, p. 52.
- 6) “Rose of Lebanon”は現在3種類（手書き原稿、タイプ原稿）の原稿があるが、小論では、1995年に発行された*The Oxford American*に発表されたものを考察する。
- 7) William Faulkner, “The Big Shot” in *Uncollected Stories of William Faulkner*, ed. Joseph Blotner (New York: Random House, 1979), p. 508.
- 8) William Faulkner, “Dull Tale” in *Uncollected Stories of William Faulkner*, ed. Joseph Blotner (New York: Random House, 1979), p. 531.
- 9) *Ibid.*, p.531.

- 10) William Faulkner, "A Return," in *Uncollected Stories of William Faulkner*, ed. Joseph Blotner (New York: Random House, 1979), p.573.
- 11) *Ibid.*, p.574.
- 12) Lewis Randolphの息子の名前は、“A Return”ではRandolph Gordonと表記されているが、“Rose of Lebanon”ではRan Gordonと書かれている。
- 13) William Faulkner, "Rose of Lebanon" in *The Oxford American*, (May/June, 1995), p.57. この作品からの引用及び作品への言及は全てこの版に基づくものとし、以後、引用箇所には括弧内に頁数を示す。
- 14) Lewis Randolphの夫は、“A Return”ではCharles Gordonと表記されており、“Rose of Lebanon”はCharley Gordonと書かれている。小論では、言及する作品に応じて使い分けている。
- 15) Frederick L.Gwynn and J. L. Blotner, (eds.), *Faulkner in the University*, pp.87-88.
- 16) William Faulkner, *Absalom, Absalom!* (Penguin Books, 1936), p.158.